

2021年度 入学試験問題

国語1科入試

国語

注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 試験時間は60分間です。
3. 問題は□～□までです。
4. 解答はすべて解答用紙に書きなさい。
5. 解答用紙に受験番号、氏名を書きなさい。

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

科学で見出された原理や法則を、実際の物質に適用して人間にとって役に立つ人工物を創造するのが技術です。人間にとって役に立つということは、人々の生活を向上させて健康で文化的な生活を送れること、さまざまな道具や機械を作って人々が便利で効率的な暮らしができること、エネルギーや資源を有効に利用して生産力を上げ、豊かな消費生活が実現できること、というような点が挙げられるでしょうか。A、それがマイナスに作用して健康被害や大事故が引き起こされ、人々を苦しめ死を招くことすらあります。役に立たないどころか、害悪になる可能性もあるのです。

歴史を振り返って見れば、科学と技術が緊密に結び合った結果、人々の生活環境が上昇してきたことは明らかです。エアコンがカンピした住環境となり、栄養不足が克服されて寿命が延び、病気になると治療が受けられて健康が回復でき、食糧増産が可能になって地球上に75億人もの人間が養え、飛行機や電車の発明で人間や物資を遠くへ速く輸送することができ、大量生産で衣料や生活必需品が安く手に入れられ、コンピューターによって効率的に機械を動かし、というふうに科学・技術がもたらしてくれた効能は数多くあります。1000年前、500年前、1000年前、50年前と比べれば、技術が加速度的に（時間が経つほどより大きく急速に）進歩してきたことがわかるでしょう。

私たちの身近な道具でも、眼鏡は眼の能力（視力）の不足を補って字や景色がよく見えるようになり、自転車・車・電車・飛行機はXの能力を拡大して私たちの行動半径を大きく広げ、鉛筆や万年筆やボールペンは字を書く手段を豊かにして手の能力を格段に上昇させ、電話はキータイになりスマホになって音声だけでなく大量のデータを送受信でき、

計算機やコンピューターは複雑な計算や多量のデータの処理を高速でこなすようになって脳の能力を広げています。このように、道具や機械を使うことによって人間が持つさまざまな能力を何千倍にも拡大するとともに、私たちの生活領域のみならず知覚領域も大きく広げ、多くの人と結びつき交流する機会が増え、世界の見方も狭い地域に閉じられた目から地球大へと開かれるようになりました。

このように科学・技術の成果は、人々のこれまでの狭い社会観や人間観を大きく広げて新しい可能性を拓き、限られた個人の経験のみに止まっていた歴史観や文明観を根底から広げさせ、多様に展開する世界を見て自然観や宇宙観を新たに構築し直す、というふうに人類の生き方についての根本的に重要な思想や哲学の変革の契機を与えてきたのです。科学・技術が単に道具や機械やインフラなどの人工物を通じて便利で機能的な社会をもたらしたことでなく、それによって人類の思考様式や文明の形態にまで革命を促すことになったと言えるでしょう。つまり、科学・技術が人間を取り巻く物質世界の変革を導いたとともに、それによって①人間の精神世界を豊かにし、かつ知的領域を拡大なものに拡大してきたというわけです。

このように科学・技術の効能は文明史にまで及ぶほど大きいのですが、他方ではその弊害も劣らず大きく、人類の存続を脅かすほどになっていることは否定できません。（中略）

※2011年3月11日の東北地方太平洋沖地震に伴って勃発した福島原発の炉心熔融（メルトダウン）事故は、②現在の科学・技術のレベルが等身大のスケールではなくなり、いったん事故が起こると、とてつもなく大きな被害を引き起こすことを見せつけました。かつて寺田寅彦（1878～1935年）は「文明が進めば進むほど災害は大きくなる」と

言いました。文明の進展とともに、地下街や高層ビルが建ち、ナラんだ都市は画一化した姿となり、交通機関は高速で大量輸送を行い、海を埋め立てて高層建築を作り、地下街や高速道路を張り巡らし、というふうな注4 脆弱な都市構造としてしまったために、いったん地震や津波などの天災が起れば被害は確実に増大することを予言したものです。

ましてや日本では、放射能という人体に危険な物質を大量に抱え込み、反応が進むにつれ危険な放射能が増えていく原発を海岸縁に何十基も建設したのですから、大きな危険と隣り合わせの生活を送ってきた（今も送っている）のが現状と言えるでしょう。原発が暴走し始めると水をぶっかけて原子炉を冷やすしか方法がありません。まさに欠陥技術なのですが、安定して大量の電気エネルギーが得られるとの長所に目がくらんで、重大な危険という短所を考えないまま原発の建設を進めてきたのです。

また、世の中が便利になり効率化したことから、どんどん時間が加速され、私たちは忙しい生活を送るようになってしまいました。便利にするということは、それによつて雑用に取りられる時間がセツヤクでき、私たちの自由時間が増えて、芸術や学問や趣味など自分の好きなことに注5 余暇が使えるようになるはずでした。しかし、現実には次々しなければならぬことが待っていて、好きなことに使える自由時間はかえって減る一方だし、「早くしなさい」と急かされるばかりです。「便利になればなるほど自由時間がなくなっている」のです。

それは人間が欲張りのため、あれもこれもとすべきことを詰め込むようになったためかもしれません。さらには、コンピュータで注6 ネットサーフィンし、スマホのいろんなアプリで遊ぶようになったように、科学・技術の成果を追いかけるのに時間が潰されていくこともあるでしょう。

う。便利さに付け込んでお金と時間を使わせるよう人を誘惑する技術も開発されているのです。事実、私たちは、技術を追いかけることに必死になり、その結果、技術にコントロールされる（操られる）存在になりかかっていると言えるでしょう。③ 科学・技術の持つ魔の力を認識する必要がありそうですね。

そのことは、身近にあつて日常的に使っている道具や機械が、私たち人間が持つ能力を拡大したという先に述べた効能とは裏腹の、人間が持つ固有の能力を奪っているという弊害があることを考えれば納得できるかもしれません。眼鏡は視力の弱い人間への注7 福音ですが、眼鏡をかけたとどんどん度が進み、ますます視力が衰えるようになります。胃を手術して点滴で栄養を摂るようになると胃が食べ物を消化する能力が衰え、しばらくは薬の助けを得なければ栄養が摂れません。エアコンのおかげで猛暑を凌ぐことができるようになりましたが、体の汗をかかなくなり、衰えたため、温度が高い所に行っても汗をかかなくなり、そのため熱が体内に籠って熱中症になってしまふ患者が増えました。

これらは、いずれも人間の肉体は怠け者にできていて、その部分を使わないと衰えて能力が低下してしまうことを物語っています。B、道具や機械が私たちの持つ能力を肩代わりするようになると、人間が本来的に持つ固有の能力を失っていくということを意味しているのです。実際、計算機を使うようになって暗算や筆算ができなくなったとか、コンピュータでワープロ機能を使うようになって漢字が思い出せなくなった、ということも多くの人が言っています。ある地域で、バスが廃止になって自家用車ばかりに乗るようになった結果、糖尿病患者が増えたというデータもあります。便利さばかりを追求していると、私たちは無能力人間になりかねないという警告です。（中略）

科学・技術は、私たちの生き様や考え方、そして人間の能力にまで大きな影響を与えており、単純に善悪とか長短とか正負というふうには言えそうにありません。表裏一体なのです。それだけに、私たちは科学・技術のさまざまな成果をじっくり吟味しながら採否を考えるクセを身につける必要があります。

(二部内容を省略しました)

【池内了『なぜ科学を学ぶのか』】

- 注1 契機：きっかけ。
注2 インフラ：産業や生活の基盤となる施設のこと。
注3 弊害：害となること。
注4 脆弱：もろくて弱いこと。
注5 余暇：余ったひまな時間。
注6 ネットサーフィン：インターネット上で興味の赴くままに情報を検索すること。
注7 福音：喜びをもたらすもの。

問一 ……線 a 「カンビ」・ b 「ナラ (んだ)」・ c 「セツヤク」のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 [A]・[B] に当てはまる言葉を、次のア～オからそれぞれ選びなさい。(同じ記号は二度使用しないこと)

ア さらに イ つまり ウ しかし

エ むしろ オ たとえば

問三 [X] に当てはまる言葉を、漢字一字で答えなさい。

問四 ……線① 「人間の精神世界を豊かにし、かつ知的領域を拡大なものに拡大してきた」とありますが、このようなことが起こった理由として最も適当なものを、次のア～エから選びなさい。

ア 計算機やコンピューターの発達によって、人間の考える力が向上したため。

イ 技術の発展によって生じた問題を解決することで、思考様式が変化したため。

ウ 効率的な社会が実現することで、学問や芸術に取り組む時間が生まれたため。

エ 多様な世界に触れることで、これまでの狭い物の見方が大きく広がったため。

問五 ……線② 「現在の『なくなり』とありますが、「科学・技術のレベル」が「等身大のスケール」ではなくなるとはどういうことですか。それについて説明した次の文の [1]・[2] に当てはまる言葉を、本文中からそれぞれ六字でぬき出しなさい。

* 科学・技術のレベルが急速に [1] ことで、人間には [2] できない規模のものになってしまったということ。

問六 —— 線③「科学・技術の持つ魔の力」とありますが、筆者は、

科学・技術によって人間生活が、災害や事故以外に、どのような悪い影響えいきょうを受けていると考えていますか。本文中の言葉を用いて五十字以内で説明しなさい。

問七 本文には次の一文がぬけています。本文の※より後で、この文が入る直後の文の最初の五字を答えなさい。(句読点なども一字にふくみます)

* 人間はあらゆる危険こくを克服こくふしたと傲慢ごうまんになつていられるのかもしれない。

問八 本文についての説明として最も適当なものを、次のア～エから選びなさい。

ア 筆者は、科学・技術のプラス面には目を向けずに、マイナス面ばかりを強調して述べている。

イ 筆者は、科学・技術のマイナス面を認めつつも、プラス面についても公平に評価している。

ウ 筆者は、科学・技術のプラス面も、結局はマイナスの効果しかもたらさないと警告している。

エ 筆者は、科学・技術のマイナス面は、プラス面によってカバーできると前向きに考えている。

問九 —— 線「科学で見出された原理や法則を、実際の物質に適用して人間にとつて役に立つ人工物を創造するのが技術です」とありますが、このような技術の具体例を挙げ、次の(1)～(3)の三点が分かるように、例にならつて四十字以上、六十字以内で説明しなさい。(句読点も一字にふくみます)

(1) どのような「原理や法則」を適用したのか。

(2) どのような「人工物」を創造したのか。

(3) どのように「人々の生活を向上」させたのか。

(例) 土を高温で焼くと固くなる性質を利用して土器を作り、人々が食物を煮にたり炊たいたりできるようにした。

(下書き用)

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

東京で強豪スイミングクラブ・ビクトリーに所属していた小学六年生の「おれ（向井航）」は、引越し先の佐渡島で出会った同級生の海人、信司、龍之介とともに大会を目指すことになった。四人での練習中、航が提案した厳しいメニューに龍之介と信司が途中で帰ってしまい、海人は二人を追って行った。

あーあ。やる気失せた。

しかたなく練習を切り上げて更衣室に行くと、もう当然だれもいなかった。

でもロビーに向かうと、三人の背中が見えた。

まだいたのかよ。

さっと見えない位置に隠れると、信司のぼやく声が聞こえてきた。

「そりゃ……向井くんはすごいよ。県大会にも余裕で行けるだろうし、いいアピールになると思う。でも……やっぱりついていけない」

龍之介が低い声で言った。

「おれたちは、やっぱり今まで通りのメニューで練習すつからな」

「……向井くんだって、みんなが県大会に行けるように考えてくれてるんだよ」

海人の説得に、龍之介が声を荒らげた。

「はあ？ 何あいつの肩持つわけ？ どっちの味方なんだよ！」

「味方とか、関係ないだろ」

「海人……おれたちより向井の方が大事なのかよ？ 違うよな？ あいつのタイムが必要なだけなんだろ？」

今すぐこの場から立ちさりりたいのに、体がすくむ。

「ああ」

海人の返事に、思わず耳をふさいだ。

これ以上、聞きたくない。

A をかんできびすを返すと、更衣室に戻った。

なんだよ、これじゃ……やっぱりビクトリーの時と同じじゃないか。

あいつと泳いだら、違う世界が見えるかもって思ったのに。

海人は、あいつらは、タイムだけが、必要だったんだ。

胸の奥が焼けるように痛い。

しばらくして、もう一度ロビーをのぞくと、みんないなくなっていた。

外に出ると、強い海風がふきつけた。

海は、重い雲の色を映して、鉛色に広がっていた。

a ヨクシツの土曜日。

何もする気になれず、ふとんの上で寝返りをくり返していると、一階から父さんの声が響いてきた。

「航、友だちが来てるぞー」

……えっ、友だち？

ドキツとして起き上がる。

窓から玄関を見下ろすと、サラサラの黒髪が見えた。

海人！？

しぶしぶ玄関に行くと、父さんがにこやかに海人に話しかけている。

「おはよう」

① 海人はおれに気づくと、何事もなかったみたいにあいさつしてきた。無言で、父さんの脇をすり抜けるようにスニーカーをはく。

外に出るとピシヤツと戸をしめた。

海人は一瞬^{しゅん}たじろいだけど、おれの目をまっすぐ見て言った。

「……きのうは、ごめん」

「……は？ なんのこと？」

内心、心臓が鳴りだしたのに気づきながらも、キツイ口調になる。

「龍之介と信司に話してみたけど……まだ説得できなくて」

おれは海人の目から視線をそらすと、「別に、もういい」と言った。

自分でも、イヤな態度だなんて思う。

でも……。

きのうの海人を思い出すと、くちびるの裏側をかんだ。

いい子ぶりやがって。バレてないと思ってるのかよ。

「今日さ、本当は練習休みだけど、きのうの分も向井さんと練習しようかと思ってる」

「……行かない」

「えっ」

「……おれ、もう行かないから！」

海人はしばらくおれを見つめていたけど、「わかった」とひとこと言う
と、帰っていった。

小さくなる後ろ姿を見ると、なぜか胸がひりひりと痛みました。

(中略)

自分の部屋へ戻り、またふとんの上でゴロゴロしていると、戸がノックされた。

「航、スーパーへ買い物に行くんだけど、ちょっとつきあわないか」

父さんが、買い物？

ことわろうかと思っただけど、このまま家にいると、よけいなことばか

り考えてしまいたいそうさ。

「……行く」

スーパーで食材を買い出しすると、父さんはしばらくだまって車を走らせた。

大きな交差点を曲がると、海岸線に出た。

今まで見た中で、一番まぶしい海の光に、目を細める。

海岸線を走っていると、^注ドリムブルーが近づいてきた。

「そういえば、引越してきた日に、あそこの横断歩道を背泳ぎの格好^かで渡^{わた}っている子がいたよな」

「……それがさっきのやつ」

「え、そうだったのか？ もしかして、温泉で背泳ぎが速いって話題になつた子か？ ばあちゃんの友だちの孫の……」

「うん、そう」

そっけなく言う。

「タイムしか知らないけど、航のいいライバルになるんじゃないか？」

は？ ライバル？ 海人が？

一瞬、海人とレースをした時の、ぞくぞくして違う世界が見えるような感覚が体をおそってきた。

……いや、もういい。

そんなものを追い求めて、もうがっかりするのはごめん。

っていうか、やっぱりスイミングはやめとくって言ったのに、父さん、

聞いてなかったのかよ。

また今までみたいに父さんに口出しされたたくない。

信号が赤になり、父さんが車を停^とめた。

ちようど、初めて海人を見た場所だった。

「さっきの子と、何か……あったのか？」

「……別に」

言う気にはなれない。

父さんは何か言いかけたけど、だまって防波堤ていぞいに停車した。

② ① 少し、海でも見るか」

しかたなく降りると、父さんは海を眺ながめた。

今日もまだ少し風が強く、ブロックに白い波が打ちつけている。

「航、すまん。実は佐渡さどに引越したのは……ばあちゃんが心配だったのもあるけど、父さんが会社をやめて、佐渡でやり直したくなったからなんだ」

「えっ」

「会社で働くのが、つらくなってしまったんだ。会社の業績が悪くなつてな……上司がたてた実現できないような高い目標を部下につきつけて、達成できなければ給料を低くしたりするのを、止められなかった……」

最初はかばおうと思つたけど、そのうち、それが父さんの仕事みたいになつていった」

おれは首をもち上げたけど、父さんの顔をまっすぐ見ることができなかった。

「会社はリストラじゃないって言ってたけど、何人もやめていったよ……。最初は胸が痛んでいたけど、そのうち生き残るためにはしかたない、つて思うようになってな」

おれはごくつとつばを飲むと、父さんの顔をしっかりと見た。

「航には、中途半端ばな時期に引越しを決めて悪かつたけど……」

③ おれは、精一杯ばい首を横にふろうとしたけど、ぎこちなくなつてしまつ

た。

父さん……バリバリだったんじゃないのかよ。

いつも疲つかれて見えるのは、ただ忙いそがしいからだつて思つてた。

おれ……何も知らなかった。

「仕事をすぐに見つけなくて、何やつてんだつて思つてるかもしれないけど……今度はちゃんと考えたいんだ」

声をしぼり出す父さんに、うなづくことしかできない。

「会社に入った同期で、父さんはトップだった。母さんと航のためにも、ずっといい営業成績をあげ続けて、だれよりも早く昇進しやうしんするんだつて思つてた」

おれはハツとした。

なんか、おれと父さん……二ふたてる。

当たり前か。ずっと父さんがおれに言い続けてきたんだもんな。

『がんばればできる。一番をめざせ』……つて。

「だけど……会社で一番楽しかった仕事は、新入社員の時に、先輩ばいとみんなで成功させたプロジェクトだったんだ。あとの二十年は、何をめざしてたんだろうな」

父さんはハハツと笑うと空を見た。

おれは、首を大きく横にふつた。

「航はやっぱりスイミングクラブに入らないつて言ってたけど、本当にもういいのか？」

「……」

(中略)

車に戻り、父さんが発車させると、道路をはさんで向かい側の歩道を海人が歩いているのが見えた。

「……海人？」

信号が青に変わってしまい、車が海人を追い越していく。思わず窓を開けて、後方に目を向け、海人の姿を確かめる。

「どうした？ 車、止めるか？」

父さんに聞かれたけど、返事ができない。

海人はプールバッグを持っていて、髪がぬれているように見える。

一人で……練習してたんだ。

「航、だれかいたのか？」

「あ……いや……朝、うちに来た海人ってやつが」

海人のことだから、きつとみんなも誘ったんだろう。

でも、龍之介も信司も来なかったんだ。

「海人くん、ドリームブルーに行ってたんじゃないのか？」

父さんの言葉に首をふる。

「……知らない」

父さんが車を止めると、おだやかに言った。

「航、もうちよつとだけ、自分から手を伸ばしてみれば」

は？ おれから……？

ずつと握っていた拳を開いて、自分の指先を見る。

おれから、つてどうすればいいんだ。

「水泳だって、最初はおぼれそうになってもがいていたけど、手を伸ばし続けたから、泳げるようになったんだよな」

泳ぐように……手を伸ばす？

「ビクトリーの時は、一人でがんばってたみたいだけど、あんなふうにうちに来てくれる子、いなかったんじゃないのか？」

くちびるをかむ。

海人の背中がどんどん小さくなる。

「一人で勝つのは、すごい。でも、みんなで勝つのは、強いぞ」
強い……？

父さんがニツと笑った。

「ちよつと、行ってくる。父さんは、帰ってて」

④ おれは車のドアを開けると、海人に向かって駆け出した。

「か……海人っ」

c シンコキユウしてから声をかけると、海人がふり返った。

ごくつとつばを飲む。

「一人で泳いできたのか？」

プールバッグを見ながら聞くと、海人は肩をすくめた。

「うん、みんなにフラれたから」

やつぱり……。

海人のぬれた髪を見ると、胸がまた痛みだす。

でも……龍之介と信司のことは本当に必要だけど、おれは違うんだよな。

声をかけたものの、どうしていいかわからずに立ちつくしていると、

海人が口を開いた。

「向井くんは、なんでこんなところにいるの？」

「あ、いや……たまたま」

おれが答えると、海人はふつと笑った。

「これから、公園に行こうと思ってるんだけど、向井くんも一緒に来る？」

「えっ？」

「信司が、きつといるから」

しかたなくついていくと、^⑤信司が公園のベンチでゲームをしていた。「本当にいたな」

おれがつぶやくと、海人は「でしょ」と言って、信司に近寄っていった。

(中略)

「ぼく……大会に出るのが自分の平泳ぎだけだったら、もしダメでも迷惑わづかけないって思ってた。でも、向井くんのおかげでメドレーリレーにも出られることになったから、絶対がんばらなきゃって……だけど、ついていけないって」

信司の声が小さくなる。

「向井くん……水泳にはやっぱり生まれつきの才能があったんじゃないかい？」

海人が信司のとなりに座ると、信司にやんわりと言った。

「それは、ちよつと違うんじゃないかな」

信司がきよとんとする。

「向井くんは、すごく練習したんだと思う。努力しなきゃ、あんなにきれいなフォームにならない。あんなに速いタイムになれるわけないよ」

一瞬、心がぐらりとゆらいだ。

こいつ……本当はおれのこと、どう思ってるんだ？
信司はふう、とため息をついた。

「海人は、やっぱり向井くんが好きなんだね」

へっ？

海人を見ると、いつもの涼しい顔すずをしている。

「だって、きのう、プールから帰ろうとした時に言ってたじゃん」
信司の言葉に、きのうの三人の背中を思い出す。

「向井くんのタイムは絶対必要だけど、それだけじゃない——って」
えっ……。

「向井くんと泳いだら、世界が変わる気がしたって」

世界が……？

「今まで行ったことのない場所へ、連れて行ってもらえると思ったって」
^⑥体温が、一気に上がる感覚がした。

「すごく、良かったと思った。ぼくたちじゃ、どうしたって、海人に肩をならべられないから」

「信司……？」

海人の目に、とまどいがはしった。

「でも……さみしくて。ついていけないけど、一緒に泳ぎたかったんだ。

ぼくも……」

「ふざけんな」

海人が信司にデコピンのまねをした。

「おれがおいていくわけないだろ。おれを一人にするなよ」

信司が海人を見て、小さくうなずく。

(一部内容を省略しました)

【高田由紀子『スイマー』】

注　ドリームブルー……航たちが練習をしているプールのある施設。

問一 ———線 a 「ヨクジツ」・ b 「ニ(てる)」・ c 「シンコキユウ」のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 ———線 A に当てはまる言葉を、本文中から四字でぬき出しなさい。

問三 ———線①「海人」とありますが、ここでの海人についての説明として最も適当なものを、次のア～エから選びなさい。

ア 県大会のためには航のタイムが必要だが、やる気をなくしているのではないかと心配して練習を続けさせたいと思っている。

イ 信司と龍之介を説得するためとはいえ、心にもないことを言ってしまった後ろめたさからつとめて自然に航に接しようとしている。

ウ 昨日の会話を聞かれていたのではと不安に思い、さりげなく練習に誘うことで航の様子を確かめようとしている。

エ 県大会のためには航の提案したメニューが必要だが、みんなの賛同を得られず、せめて航と自分だけでも練習したいと思っている。

問四 ———線②「少し、海でも見るか」とありますが、「父さん」が海で話をしようとした意図を説明した次の文の 1・2 に当てはまる言葉を、本文中からそれぞれ指定の字数でぬき出し、3 に当てはまる言葉を自分で考えて十字程度で答えなさい。

*
1 (三字以内) になることが大事だとかつては考えていたが、
2 (六字) 方が楽しく、また強かったのではないかという思いを自らの経験を通して伝え、今の航が
2 (六字) ために、
3 (十字程度) ことを後押ししようとしている。

問五 ———線③「おれは、精一杯首を横にふろうとしたけど、ぎこちなくなってしまう」とありますが、ここでの航についての説明として最も適当なものを、次のア～エから選びなさい。

ア 息子に謝罪する父親の姿を見てなさけなく思い、いたたまれなくなっている。

イ 謝らなくていいと伝えたいが、予期していなかった内容だったため動きが不自然になっている。

ウ 唐突に父が今までの教えと矛盾した話を始めたので、意図がつかめずに戸惑っている。

エ 父は仕事で活躍していたと思っていたため、父の告白を聞いて失望を隠しきれないでいる。

問六 ———線④「おれは車のドアを開けると、海人に向かって駆け出した」とありますが、ここでの航についての説明として最も適当なものを、次のア～エから選びなさい。

ア 父からのアドバイスを受けて、自分の思いを伝えるために自信を持って走り出している。

イ 三人から誘いを断られた海人のさみしそうな表情を目にして、思わず走り寄っている。

ウ 具体的な考えがあったわけではないが、父の話を聞いて思い切つて行動している。

エ 一歩ふみ出すことで状況が変わるだろうと考え、あまり考えすぎないようにしている。

問七 ———線⑤「信司が公園のベンチでゲームをしていた」とありますが、ここでの信司についての説明として最も適当なものを、次のア～エから選びなさい。

ア 目標に向けて仲間とともに練習をがんばりたいが、自分の力不足をもどかしく思っている。

イ 厳しい練習についていけなかった自分を責め、航や海人に対して申し訳ないと思っている。

ウ 生まれつきの才能があり、努力しなくても結果を出せる航や海人をうらやましく思っている。

エ 他のメンバーの負担となることが心配で、チーム競技のリレーへの参加は見送りたいと思っている。

問八 ー線⑥「体温が、一気に上がる感覚がした」とありますが、ここでの航の気持ちを八十字以内で説明しなさい。

(下書き用)

問九 本文についての説明として適当でないものを、次のア～エから選びなさい。

ア 海人はあまり感情的になることはなく、よく周りのことを見て落ち着いて行動している。

イ 冒頭の場面である練習後のロビーの外の情景は、航の胸の痛みを反映した描写びようとなっている。

ウ 航の視点を中心に航の父や海人からの視点も交えることで、登場人物の内面がいきいきと描えがかれている。

エ 航の父は、息子に対してアドバイスするだけでなく、自分自身も変わろうとしている。